

かやうにして我が國の東方學はフランスに於て先づ甚だ尊重せられることになり、フランスの東方學者等はみなこの流を汲んで、例へばマスペロ・アッカン・ドミエヴィル、ガスパルドン諸氏の如きもその述作中に常に本邦學者の説を引用することを怠らないのみならず、これらの諸氏はみな我が國に來遊して、我が同學諸氏との間に密接な交友を結び、互に研磨砥厲するに勉めたのであります。獨りフランスに於てのみならずこの傾向はまた廣く歐米の學界にも及び、フランスに於けると同様の風潮を生ぜしめることになつたのであります。こんな風になつたのは無論我が東方學の進歩發達に歸因することは言ふまでもありません。然も前に述べたやうに歐米東方學の牛耳を執つたペリオ氏が、かゝる發達を認めて廣くこれを世界に紹介するに努めたのに依ることが大きいと言はねばならぬ次第であります。

我が東方學の成績を如何に熱心に彼が注意して居つたかは、私がパリに於てまた日本に於て彼と談論の間にも常に觀取したことでありますが、今こゝに彼の私に宛てた書翰の中の一節を引用して、これを證示致しませう。この書翰は一九三一年昭和六年十一月二十六日附けでパリから發送したもので、明年即ち昭和七年の初には日本に來遊して會談が出来る豫定であつたが、それを延期しなければならなくなつたので、書面によつて依頼する旨を述べ、日本の東方學關係の雜誌でその手許に缺號となつてある分を細かに書き上げて送附を頼み、その末に、「かやうな面倒をかけて申譯ないが、然も日本の優秀な論著を引用し得ないことは自分の甚だ遺憾とするところである。パリではこの外日本の貴重な著述も多くは缺け、例へば白鳥教授小川教授に獻ぜられた記念論文集の如きも一冊も存しない状態である！」と記して、深甚の遺憾を表して居るのでもよく解ることゝ存じます。その日本語を讀みこなす